

愛と死の幻想

—— シャルル・ノディエ小論 ——

床 鍋 剛 彦

一人の人間（あえて作家とは言わないが）を創作活動へと駆り立てる動機は実に多様である。ある事件や特殊な社会的状況が作家の創作姿勢に影響を与えたか否かを論ずることは、たとえ作家自身の証言がある場合でさえも、慎重に扱うべき問題である。しかし時にはそれを絶対の前提条件として論じ得るような、作家と事件のそれほど重大な結びつきが存在することもある。ノディエにとってのフランス革命がまさにそれである。

幻想文学者として、また若きロマン主義者たちのサロン（セナクル）の主として文学史にその名を残すシャルル・ノディエが、地方都市ブザンソンの法律家の子として生まれたのは革命前夜の1780年のことである。大革命の激動期にはブザンソンの神童として革命の英雄をたたえる演説を起草したり地元のジャコバン・クラブに参加するなど、少年ながら革命の熱狂のさなかに身を置いたノディエだが、ギロチンに象徴される革命の非人間性に挫折し、成人後は次第に厭世的になってゆく。しかし彼が本格的に文学活動に傾注するのは三十代、すなわち1810年代も半ばを過ぎてのことである（それ以前にもいくつか注目すべき作品はあるのだが）。革命により価値観が一変したフランス社会にあって、この大事件が一人の人間の中で一つの「歴史」となり、なんらかの形で「決算」されるためにこれだけの時間が必要だったということだろうか。エッセーや回想録はいうまでもなく、いかにも当時の流行に乗ったような幻想物語の中でさえも、彼が常に革命の二文字にこだわり続けているのを見ると、「青春のさなかにあっては青春を描けない」といういささか色あせた言い回しの、「青春」を「革

命」に代えてつぶやきたい気がしてくる。革命の世代と呼ぶには若すぎ、革命後の世代と呼ぶには年長すぎた一人の人間が、ことさらにペンを執って語ろうとしたことは何だったのか。

本稿では、彼の作品の中では比較的初期にあたり（とはいえ39歳の作ではあるが）、題材の点で革命の余韻が最も生々しく感じられる1819年の中編小説「テレーズ・オベール」を考察の出発点に据えて、彼の文のいくつかをほぼ十年ごとに拾いながら、「革命後」の社会に生きた一人の人間を創作へと駆り立てた一つの動機の在り方、ひいては後世に伝えるべき彼のメッセージのようなものが存在するならば、せめてその一端なりとも探ってみたいと思う。

なお、ノディエの伝記的事実についてはフランスの研究者によって既に多くのことが語られている。しかし、作家の伝記から作品を探ることは、特にそれが研究者にとって外国文学である場合、短絡的判断を生む危険も大きい（たとえばノディエの青春期における女友達リュシル・フランクの死などはある面では本稿のテーマと深く関わるともいえるが、その影響で作品が生まれたなどという推論はいささか軽率に思われる）。本稿は小論ということでもあり、ノディエの私生活上の出来事などにはあえてふれず、もっぱらテキストに現れた精神性だけを問題にしたいと思う。

1. 「テレーズ・オベール」(1819年)

時はまさに大革命のさなか、青年アドルフは貴族の末裔として反革命軍に加わり、追われる身となる。女装して逃げるうちに尋問を受けるが、革命軍のオベール長官の温情により救われ、長官の娘テレーズのもとに身を寄せる。そして娘アントワネットとしてテレーズと親交を深めるが、テレーズへのつもの思いに打ち勝てず、ついに自分が男であることを告白する。やがて彼は王党軍に合流することになり、愛し合う二人は泣いて別れる。革命派でありながらその穏和さゆえに逮捕されたオベール長官に再会

したアドルフは、テレーズが病気であることを知り、急いで引き返す。そのころ反革命軍の盟友モンディオン侯爵がギロチンにかかって死んだとわかり、革命の残酷さに憤るアドルフはテレーズの無事を確かめたら自分も死地へ赴こうと決意する。だがテレーズは天然痘にかかって失明し、瀕死の床にあった。悲痛な愛の対話の後にテレーズは死に、アドルフは女装を捨てて自ら革命軍にとらわれ、裁判を待つことになる――。

1793年～94年頃を舞台とするこの小説は、当時の社会情勢の克明な記録でもなければ、自由な空想による幻想譚でもない。そこにあるのは、革命の嵐にもてあそばれた一つの社会を苦くふり返る哀惜のつぶやきである。

モンディオンが死んだ！ とわたしは地面をかきむしりながら言った。わたしの父も死んだ！ キスしたことさえほとんどなかった哀れな母も、牢の中で、天寿を全うせずに死んだ……わたしが愛したものはみんな、処刑台の露と消えた……何人かの狂信者のばかげた夢のいけにえにされたのだ……⁽¹⁾

1819年になってこのような作品が書かれたことに意味がある。革命とその後の社会に対する幻滅は、ロマン主義の華やかな開花を待つまでもなく、ノディエの内面にワインの澱さながらに確実に堆積しつづけていたにちがいない。この小説はノディエの作品の中ではけっして出色のものではないが、革命にきっぱりと罪状宣告をしたという点でその後の創作に与えた意義は大きかったはずである。

主人公のアドルフという名、発見された原稿であるという設定などに、バンジャマン・コンスタンの『アドルフ』（1816年刊）の影響を指摘することも可能だが、ノディエのアドルフはコンスタンの主人公ほど愛に醒めてはいない。

テレーズと共に寝ているのだ、盲目で瀕死のテレーズと共に寝ているのだと思うと、わたしは苦痛と陶酔のいりまじった、いわく言いがたい感情にとらわれた。わたしはそれを、かつて約束されていたはずの至福と比較し、人間の一生は運命のすべてを享受できるわけではないのだと心から悟った。しかし、わたしの人生には多くのものが欠けているとはいえ、それはこの世で終わるものではなく、神はただわたしを苦しめるためにだけ、幸福を望み永遠を理解する魂を与えてくれたわけではないのだということも確信していたのである。⁽²⁾

この青年はテレーズの病を知る前から幾度となく「なんともしれぬ死の欲求」⁽³⁾にとらわれ、「死を思うことはわたしにとってとても快いことに思われた」⁽⁴⁾とまで言うような人間である。目を凝らして読むとそれは単に没落貴族の嘆きというよりは、時代からはじき出された人間の諦めのつぶやきとして、一種の普遍性を感じさせる。そしてそれが最愛の者の死に直面してはっきりと一つの目的を持つ。すなわち、死後世界での恋人との永遠の合一である。

「ああ、ぼくはまもなく、まもなく君に会えるんだ、そしていつでも、いつでも君に会えるようになるんだ！……」そう確信すると、なんともしれぬ力がわいてきた。なぜなら、わたしの全能力がこの確信に吸い込まれていたのだ。⁽⁵⁾

大義のためには人命も容赦なく奪い去る革命の時代を知る者（ノディエは死刑廃止論者であった）にとって、「永遠」という概念はとりわけ重要な意味を持っていたにちがいない。しかしそれなら、すぐにも恋人の後を追えばよいではないか。ところが自殺は神にそむくことであり、「不幸の中にあってもキリスト者が期待しうる唯一の恩恵、この世で失った愛する

ものともうひとつの世で再会するという恩恵まで禁じてしまう」⁽⁶⁾ ことであるから、後を追って死ぬことは許されない。死後の永遠を得るためには今しばらく幻滅の人生を生き続けなければならない。

「テレーズ・オベール」はノディエにとって、大革命の一つの「決算」であったと同時に、死だけにあこがれて生きる重い明日への里程標でもあったかもしれない。この仮説を携えて、次は約十年後のノディエに目を向けてみることにしよう。

2. 「青春の思い出（マクシム・オダンの回想録）」（1831年）

生活の糧を得ることに多くの時間を奪われた1820年代を経て、1830年代になるとノディエの執筆活動はにわかに活発化する。1830～33年の数年間に、代表的長編小説「パン屑の妖精」をはじめとする種々の幻想物語、エッセー、回想録などが次々に発表される。「マクシム・オダンの回想録」として発表され、後に「青春の思い出」と改題された全五編から成る短編集は、フィクションの形をとりながらも、明らかに作者自身の若き日の記憶をつづったものである。第一編「セラフィヌ」の冒頭で主人公はこう語っている。

年老いてゆく人間に自然が与えた最も甘美な特権、それは、いとも容易に少年期の印象を取り戻すという特権である。⁽⁷⁾

主人公は人生を小川の流れにたとえ、屈曲を経て老年の安らぎの花園に思い出とともに暮らす快樂を、「この快樂だけが、幸運にも若くして死ぬ者たちが、不運にも長生きしてしまった者たちをうらやみ得る唯一のものなのだ」⁽⁸⁾ と語る。51歳という年齢が老年か否かは別にして、ここに色濃く現れるのは、現在の厭世観に裏打ちされた過去への郷愁である。

全能の神よ！ 私はあなたに対して何か悪いことをしただろうか、残りの人生を犠牲にしても少年時代のあの時間のせめて一瞬にでも立ち戻れないような何かを！ ああ！ 私のように、最初の幸福と最初の期待の幻影を抱いた人間は誰でも、最初の罪人として、いわれなき罰を受けてきた。われわれもまた、天国を失ってしまったのだ！⁽⁹⁾

注目すべきことは、この短編集に収められたエピソードがことごとく、「テレーズ・オベール」同様に、愛する女性の死を主題としている点である。この時代のノディエは、一方で童話めいた美しいファンタジーを多産しながらも、失われた青春への哀惜からはついに離れられなかった。そしてこれに、大革命への呪詛が絡み合う。同じ1831年のエッセー「愛について」でノディエは若い世代に語りかける。

〔革命期には〕われわれも、人々の不正や、党派の忘恩行為や、権力の本来的な動揺や、その手先たちの非公式の残酷さに苦しまねばならなかった。きみたちがわれわれより恵まれている点はただ一つ、体制が既に確立されているということだ。われわれの牢獄に響くこだまはなかった。それは暴君さながらに、聞く耳を持たなかったのだ。⁽¹⁰⁾

同時期の他のエッセー（「幻想文学論」「睡眠の若干現象について」など）を併せ読むと、確かにP・G・カステックスの言うように⁽¹¹⁾、ノディエが革命の残虐性のみならず革命後の実証主義社会にも深く幻滅していたことが推察される。その結果、彼の関心は空想世界と過去への追憶に向かうが、彼の追憶には愛する者の喪失という強迫観念が常に大きな影を落としている。それは「テレーズ・オベール」以来、彼の心を呪縛しつづけていたにちがいない。しかるに彼は「青春の思い出」というこの短編集でその暗いテーマをあえて執拗に見つめつづける。このペシミズムはノディエ

の幻想文学の根底につながるものとして注目すべきものと言えよう。

3. 「蠟燭祭九日祈願」(1838年), 「リディ, または復活」(1839年)

1802年初頭。二月の蠟燭祭に九日祈願をすると自分の一生の伴侶が夢に現れるという話を聞いた青年マクシムは、これを信じて実践し、夢で見知らぬ女性に会う。調べてみるとセシルという名の、彼と面識はないが夢に現れた女性によく似た娘が実在するとわかる。そしてそれは偶然にもマクシムの父の親友の娘であった。マクシムは半信半疑のまま、セシルのもとを訪れる。はたしてそれは夢に見たままの女性であり、マクシムは運命的な愛を確信するが、病弱な彼女はその夜のうちに急逝してしまう――。

昨今、日本でも女子中・高生を中心に白魔術的な「おまじない」がブームらしいが、十八世紀初頭のフランスは神秘思想の一大流行を経験し、この種の話は巷に珍しくなかった。ともあれ、物語の焦点をセシルの死だけに絞るなら、これはモチーフの点で「テレーズ・オベール」ときわめて似ている。ディテールに目を向けても、登場する司祭の相貌や言葉、自殺に関する言及など共通点が少なくない。約20年の時を隔てる二作品を結ぶ糸として、特に印象的に思えるのは「火の翼」をモチーフとする次の二文である。

時には、夜の鳥が飛びながら私の顔を掠めてゆくように感じることもあった。そして恐怖をかき立てる未知の対象を目で追ってみようとすると、またしてもセシルが火の翼 (des ailes de feu) に乗って、ついておいでとわたしを呼びながら逃げてゆくのが見えるのだった。

(「蠟燭祭九日祈願」)⁽¹²⁾

「彼女が死んだ」とわたしは叫び、全力で襲いかかる苦しみに耐えきれずに再び眠りに落ちてしまった。まもなく、まぶたの上を稲妻が掠め、雷鳴のような音が聞こえてきた。そしてテレーズが炎の翼 (des

ailes enflammées) に乗って飛び去るのが見えた。しかし彼女はわたしから目をそむけ、わたしは彼女の名を呼んで目が覚めた。(「テレーズ・オベール」)⁽¹³⁾

ノディエが意識していたか否かは知る由もないが、恋人の死に結びつくこのイメージの類似などは単なる偶然とは思いがたい。「蠟燭祭九日祈願」は、いかにも幻想譚多作の時期を経た作品らしく「テレーズ・オベール」にはなかった神秘的要素が多分に加味されてはいるが、両者を貫く通奏低音はなんら変わっていないのである。

セシルの後を追おうとするマクシムに司祭は言う。

〔自殺は〕自らの魂の避難所として虚無を求めることによって、魂に反抗することであり、しかも魂は不死なのですから、虚無を見出すこともできないでしょう。神によって創造されたものはすべて永遠に生きつづけます。そして、もし神の息吹によって生を得た者を神自身が虚無に戻すなどということが可能なら、その虚無こそが自殺の罰ともなるところですが、自殺には別の罰があるのです。すなわち自殺者は、自分が失ったものの大きさを知り、忍耐と忍従があれば得られたはずの恩恵を理解するのですが、彼にはもはや希望はないのです。⁽¹⁴⁾

キリスト教徒の自殺観はわれわれにはなかなか実感しがたいが、愛する者の死によって現世の魅力がすべて失われた後も、死後世界で永遠に幸福に結ばれるためにこそ生き続けるのだという考えは20年前の「テレーズ・オベール」に述べられたそのままである (cf. 引用6)。「青春の思い出」を經由して「蠟燭祭九日祈願」に至るノディエの精神の軌跡は、あらゆる期待に裏切られてもなお“この世に生きねばならぬ者”の苦闘の道であったにちがいない。そして、その途上でこそ数々のファンタジーが生み落と

されていたのである。

「蠟燭祭九日祈願」の翌年に発表された短編「リディ、または復活」は、夢の中での死者との語らいをモチーフとして、神秘思想への一層の傾斜が認められる作品である。ノディエの心を長年とらえてきたにちがいない死後世界での合一というテーマが、この作品では夢の中とはいえ、ついに実現されている点が興味深い（但し、主人公は男ではなく、恋人に先立たれた女性という設定になっている）。夢の中で恋人は女に言う。

ぼくらの喜びにはあんなにも悲しい思いが混在していた！ ちょっとした事件でも喜びはかき乱されたものだ。それを破壊するには死だけで充分だった。死って何なのかぼくらは知らなかったけど、あの時、死がぼくらから奪い去った唯一の大事なものを、その死だけがぼくらに与えてくれることを今は知っているんだ。⁽¹⁵⁾

「蠟燭祭九日祈願」で再確認された“望みなき社会に残されて生きる者の苦しみ”は、ここで「夜の夢」という一つのよりどころを発見する。実はノディエは既に1821年の作品「スマラ、または夜の悪魔たち」で、あるいは1831年のエッセー「睡眠の若干現象について」でこのテーマに接近している（シュールレアリスムの一先駆とされる所以である）。あるいは「リディ」という作品は、ノディエにとって積年の二つの重要テーマを同じ地平で出会わせようとする試みだったのかもしれない。

死後世界に暮らす恋人はさらに言う。

目覚めの瞬間、君がぼくの腕を離れて地上へ持って行く思い出のために、君は人々の嘲笑や憐れみの種にされるだろう。だけど人類を待ち受ける運命は君にしかわかるまい。それは生きている連中にはけっ

してわからないだろう。君のからだは、あとどれぐらいの間かわからないけれど、人生という粗末な絆につながれている。でも君の魂は、前もって不死を味わうためにこうして呼ばれたんだ。だからこの束の間の牢獄の憂鬱に、甘んじて耐えておくれ。夜になれば牢獄の扉は永遠の自由の無限の空間に向かって開け放たれるのだから。¹⁶⁾

またしても、ノディエが見ているものは「永遠」である。何よりも読者が驚かされるのは、これほどまで常に死にあこがれながら、ノディエの精神が「テレーズ・オベール」の時点から全く老いていないように思えることである。表現の仕方に変化は見られても、その本質は20年前に見られた素地のままである。直接には革命とその後の社会への幻滅から生まれた孤絶感が彼の執筆活動の契機と言えようが、ノディエの孤独はその後も真の理解者を見出すことはなく、だからこそ彼は過去の追憶へ向かい、あるいは「私は気晴らしを研究に求め、瞑想に求め、とりわけ夢の中に求めた。夢は人間の最良の状態であり、これに匹敵するものは死しかないのだ」¹⁷⁾と言って夢想の世界に閉じこもり、あるいは幻想譚の創作に我を忘れたのである。それは確かに一種の現実逃避かもしれない。だが、彼の苦悩にはもう一つ、看過することのできぬ重要な側面があった。彼がなぜ、生涯を通じてエッセーや自伝小説の中で心情を吐露しつづけたのか、ひいては彼を幻想文学創作へと向かわせた真の動機を探る上でも、この側面の理解は重要な鍵を握っている。「リディ」の語り手（おそらくは作者の分身）は声を高めて言う。

わたしは人々のもとへ帰って、彼らが苦しみ耐える助けとなろう。彼らを救うことができない時には、せめて彼らと共に泣こう。わたしはわれわれの束の間の生に結びついた数々の災厄のなかの、自分の取り分を引き受けよう。そしてできるかぎり多くの苦しみを甘んじ

てわが頭上に積み重ね、他の人々の苦しみを軽くしてやろう。⁽¹⁸⁾

この文と、「テレーズ・オベール」初版序文に書かれた次の文を併せ読む時、ノディエの執筆活動の動機はかなり鮮明に浮かびあがってくるのではないか。

この種の作品を出版する者が前もって覚悟すべき非難がある。それは、あまりにも暗い描写を読者に提供し、あまりにもつらい感情を読者の心に呼び起こすということである。幸い、こうした悲しい気晴らしはひと握りの悲痛な精神にしか受け入れられぬものであり、そういう人々にとっては、自分自身の苦痛を忘れてしまえるようなくつろぎの時にあっても、他者の苦しみに同情することのほうが必要なことなのだが、この“小説”は彼らにこそ語りかけるものなのだということは言っておかねばならない。⁽¹⁹⁾

たとえ多数に理解されずとも、どこかで自分と同じように苦闘している友を見つけて、せめて悲しみを分かち合いたい——そこにあるのは、もはや恋人の死を悲しむ愁嘆場ではなく、時代の汚泥にまみれきらぬうちにこの世を去りたいと願う魂の、しかし生きねばならぬ者ゆえのつぶやきである。革命後の社会に自己のあるべき「場」を失った人間は、同様に苦しむ他者の存在を確信する。ノディエはその、目に見えぬ他者にこそ訴えようとした。そしてそんな彼もまた、革命後の社会が生んだ一つの人生モデルにはちがいがなかったのである。

*

*

*

その魅惑を知る者にとっては空想の翼だけが救済のカギであるのに、ノディエはあえて「現実」の地平にとどまりつづけた。時代は墮落し、愛する者は去り、理解者は見出せない。過去は苦渋に満ち、現在にいるべき場

はなく、未来は虚無に等しい。それでもノディエは「現実」を意識する目をついに捨てなかった。そして一部の幻想マニアにではなく、彼の生きた「時代」にこそ語りかけたのだ。彼の幻想物語が時に奔放さを欠くとしても、そこには常に、共感者を見出してその精神的な支えになりたいという優しさだけは息づいている。それは時代によって一度葬られた者が、最後に見出した慰めだったにちがいない。そしておそらく彼の呼びかけにこだまは返らなかっただろう。だが、数々のファンタジーと共に彼が遺した来たるべき世代への次のような呼びかけは、150余年の時を経た今もなお、もしかしたら当時よりもなお雄弁に、われわれの心に何かを訴えているのかもしれない——

わたしはきみたちに過ぎ去った世紀のほうへ後戻りしてくれと懇願しているのではない。(中略)わたしは、おそらくもう存在しない宗教的感情〔情操〕だとか、もうけっして存在しない自由だとか、そんなものを救ってくれと言うのではない！——もしできるなら、愛を救ってくれ！それはきみたちの時代の神なのだ。⁽²⁰⁾

引用、他

ノディエのテキストとしては、1832～37年刊の全集を復刻した、Ch. Nodier : *Oeuvres, Slatkine Reprints* を使用 (以下 SR で示す)。1838年以降の作品については Ch. Nodier : *Contes, Editions Garnier Frères* を使用した (以下 EG)。

- (1) SR, tome. 2, pp. 363-364 (Thérèse Aubert)
- (2) *ibid*, pp. 378-379
- (3) *ibid*. p. 360
- (4) *ibid*. p. 342
- (5) *ibid*. p. 391
- (6) *ibid*. pp. 390-391
- (7) SR, tome. 10, p. 21 (Les Souvenirs de Jeunesse)
- (8) *ibid*. p. 23
- (9) *ibid*. pp. 44-45
- (10) SR, tome. 5, p. 155 (De l'amour et de son influence)
- (11) Charles Nodier, *Colloque du deuxième centenaire (Annales Littéraires*

de l'Université de Besançon, 1981) : p. 14 参照

- (12) EG, p. 830 (La Neuvaine de la Chandeleur)
- (13) SR, tome. 2, p. 393
- (14) EG, p. 835
- (15) ibid. p. 867 (Lydie ou la Résurrection)
- (16) ibid. pp. 867-868
- (17) SR, tome. 5, p. 343 (De la palingénésie humaine et de la résurrection)
- (18) EG, p. 878-879
- (19) SR, tome. 2, p. 281
- (20) SR, tome. 5, p. 156 (De l'amour et de son influence)